

平成 22 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520630

研究課題名（和文） ディスコース分析とプラクティス分析から見る中国的全体主義下の個人と人民

研究課題名（英文） The individual and the people in Chinese totalitarianism society through the discourse and the practice analysis

研究代表者

聶 莉莉 (NIE LILI)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：00258493

研究成果の概要（和文）：本研究は、文化人類学的ディスコース分析とプラクティス分析の手法及び知識社会学、思想史、政治学などの学問の視点から、中国の社会主義革命における中国的全体主義、特にその政治文化や社会統合の仕組み、社会認識のあり様を究明するものである。

具体的には、革命勝利直後の1950年代という転換期に重点を置き、その時代に相次いで行われた政治学習キャンペーンや、胡適批判運動、知識人改造運動、肅反運動、反右派闘争などの政治運動における知識人像を見つめ、個々の知識人が共産党のイデオロギーやマルクス主義への受容や、自己批判に迫られたこと、批判されたこと、また、知識人が一つの社会集団として徐々に「敵化」されていったことなどの諸現象を分析し、それを通して、中国革命の政治文化における政治体制の構造や、社会統合の組織的特徴及び社会認識論などをより明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to investigate the Chinese totalitarianism in the socialist revolution period especially about its mechanism of social integration through the discourse and the practice analysis from the view points of cultural anthropology, sociology of knowledge, thoughts and politics.

It puts emphasis upon the transition period of Chinese society in the 1950s immediately after the revolution's victory, gazed at the intellectuals in the environment of a series of political movements such as "the thoughts remodeling" "the anti-right-wing fight". Analyzed how the intellectuals accepted the Communist Party's ideology and Marxism, and how they be criticized and how did their fate become after be made as an enemy.

Through the above analysis, the political culture's epistemology, the structure of the political system, the systematic characteristic of the social integration in socialist revolution be clarified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,100,000	630,000	3,730,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：ディスコース分析、プラクティス分析、知識人、全体主義の政治、イデオロギー

### 1. 研究開始当初の背景

本研究を構想しはじめた2000年前後では、中国社会主義革命の実践に関する研究には、次のような傾向や弱点が見られていた。

(1) 革命時代の政治や社会に対する研究は、具体的な事実や経験の回想、記録の整理に偏っており、構造的な把握、即ち、その政治の仕組みに関する認識にいたるものが少なかった。

(2) 回想された経験的事実のなかには、個人の受動性や翻弄された面のみを強調するものが多く、個人や「人民」の歴史への参加や、イデオロギーへの受容などの面を見落としていた。

(3) その時代の政治やイデオロギーを分析する際、その言説の政治的論点のみにとどまり、それに含まれている社会認識論や哲学思想を析出することに至っていなかった。

(4) その時代の政治体制とイデオロギーの誤謬性や欺瞞性を強調するあまり、それを単に民衆を騙し操る虚偽のプロパガンダとすませてしまい、その言説が生まれた時代の背景やその必然性を見落としていた。

### 2. 研究の目的

上記の傾向を意識しながら、本研究はディスコース分析とプラクティス分析を通して、中国社会主義革命の社会統合や民衆動員のメカニズム及びその思想的・社会認識論的特徴を認識し、中国革命の政治文化を相対化することを旨とする。

具体的には、1950年代に行われた、革命以前の「旧中国」で教育を受けた「旧知識分子」に対する改造や批判を目的とする一連の政治運動、政治学習キャンペーン、胡適批判、知識人改造運動、肅反運動、反右派闘争などに重点をおき、そこに現れた知識人の共産党の政治やマルクス主義に対する受容や対抗、両方の思想的拮抗を、主として下記の四つの角度から分析を行い、それぞれの問題点をより明確にすることである。

(1) 革命勝利の直後、知識人たちは、新中国を成立させ、人民の擁護を得た共産党への心服により自らの意志でマルクス主義を積

極的に取り入れ、自己批判を行い、「立場」の転換をしようとした。

それに関する分析を通して、革命の衝撃や共産主義イデオロギーの人びとに対する説得力を分析する。

(2) 知識人の社会認識論としての実証主義を批判する「胡適批判」などの政治キャンペーンを分析する。それを通して、共産党政治の社会認識論や、その哲学思想の特徴を検討する。

(3) 反右派運動において、知識人は「共産党政権を反対する活動をしている」という罪名が被られ右派とされた。それに関する分析を通して、共産党政権の政治体制の特徴、一党独裁と「民主党派」との関係、人民代表大会制度などを分析する。

(4) 政治運動における批判大会、相互摘発、密告、自己批判などの組織方法を分析する。それを通して、政治運動の制度的組織的特徴と大衆動員の方法、及び「対敵闘争」を通して社会の求心力を維持するという共産党政治の社会統合の動的仕組みを検討する。

(5) 共産党イデオロギーの用語は、社会生活のすみずみまで浸透し、それと共にその思惟様式も社会成員に植え付けた。知識人もその思惟習慣を身につけることから免れることができなかった。ディスコース分析を通して、共産党政治思想の論理を分析する。

### 3. 研究の方法

(1) 西洋の現代思想における全体主義批判に関する議論を吸収しながら、一方、決してその文脈に頼り切って否定論一点張りに中国的全体主義を捉えることではない。むしろ、中国社会の歴史的な文脈に沿って考察を行い、中国的全体主義政治の実態を実証的に検討しながら構造的に把握する。

(2) 文化人類学的ディスコース分析とプラクティス分析の手法を用いながら、知識社会学、思想史、政治学などの視点も取り入れる。したがって、政治運動に関する分析を行う際、批判をめぐる言論を分析するのみではなく、政治運動の組織法も視野に入れる。また、政治運動の同行を政治勢力の間の抗争との関

係性にも目を向ける。

(3)史料に対するテキスト分析とインタビューに基づくオーラルヒストリ研究を結合する方法を利用する。

ここで言う史料とは、公文書、新聞、批判文集、未出版の個人手稿などである。

本研究は、当事者や関係者 15 名ほどに対してインタビューを実施した。

#### 4. 研究成果

知識人の共産党イデオロギーに対する受容、拮抗、対抗、及び彼らが共産党に批判され、敵とされたなどの事実に関する分析を通して、両者の間に、政治体制や、階級対立の現状、貧困などの社会問題の原因、発展道路、社会科学の位置づけなど、さまざまな問題をめぐって、対立が見られた。

例えば、次の諸問題について、対立が見られた。

政治体制について。一党独裁か、それとも、本当の意味での「人民代表制」や多党制による民主主義制度を建設するか。

中国社会の貧困問題について。地主や資本家などの「搾取階級」による搾取が主要な原因なのか、それとも、それを原因として認めながらも、世界経済特に列強諸国の経済の影響や、人口、環境、教育、伝統文化などの要素も考慮に入れ総合的に捉えるか。

社会改造の道について。暴力や階級闘争を内容とする革命によるか、それとも、政策による改善や教育による国民素質の向上などを内容とする漸進的改良によるか。

国際関係について。西側諸国を一概に敵対の「資本主義陣営」として論じるか、それとも学者同士、市民間の連携を重視するか。

政治と人文社会科学との関係について。政治が社会科学を取って代わるか、それとも、科学研究の独立性を尊重するか。

社会の現実に対する認識について。マルクス主義の理論を応用するだけで十分であり、現実を認識する必要性さえないのか、それとも、現地調査やデータ収集などの実証的研究の手法で丁寧に調べるか。

上記の諸問題について、共産党政権や社会主義革命のイデオロギーが前者の立場をとっていたのに対して、知識人たちは本来、基本的に後者の立場をとっていたが、批判運動の圧力やその衝撃で、前者を受け入れたり迎合したりせざるを得なくなった。

上記問題に関する分析を通して、政治体制の構造、社会統合の組織的特徴などをだいたひ明らかにしたばかりではなく、中国革命における社会認識論や、その政治哲学における諸特徴もより明確となった。

例えば、下記の諸問題はより明らかにした。

政治体制について。共産党自らは「人民

の政権」と唱えてきたが、人民の意志をいかに政治に反映するかについて、一党独裁の制度に大きな落とし穴があると言わざるを得ない。この問題を指摘した知識人は 1950 年代に全員「敵」とされ、彼らの言論が封じ込められた。それにもよって、このような政治体制の問題は未だに解決されていない。

社会統合について。「宣伝工作」と呼ばれたプロパガンダや、政治教育、批判キャンペーンなどによるイデオロギーの民衆に対する徹底的な植え付けと精神的コントロール、「群衆運動」と呼ばれる大衆動員法などは、社会統合の重要な方法であった。

中国革命における社会認識論と政治哲学について、次のような特徴が見られる。

a. マルクス主義の階級闘争論と唯物史観を用いて、あらゆる社会的、文化的、歴史的、民族的現象を説明しようとする一元性。

b. 人民と敵、社会主義と資本主義、搾取階級とプロレタリアート、革命と反革命などといったように、あらゆる物事を二つに分けようとする絶対主義的二分法。

c. 革命の政治には、それを支える哲学思想が存在していると思われる。

例えば、次のような概念と論理が強調された。

・マルクス主義の弁証法の「主要矛盾」と「次要矛盾」論、即ち、さまざまな要素が複雑に関連し錯綜している社会現象を「主要矛盾」と「次要矛盾」とに分けて、「主要矛盾」に重点をおくこと。

・「量変」と「質変」論、即ち、物事が量的変化を蓄積することによって、質的变化へと飛躍し、いったん質変が生じると、その性質が根本的に変わる。

・全体を強調し、個体を軽視する「大局」優先論。

・目的を強調し、目的を達するために手段を問わずにするという目的優先論。

上記諸概念や論理は、共産党政治の実践や革命を正当化し、理論付けをした。それは、時には、革命の暴力性や個体の生命を軽視するというような非人道性までも正当化した。

さまざまな批判キャンペーンや政治的宣伝の結果、知識人が自らの思想を失い、思考する方法論も否定されたこととなった。また、思考の独自性を失ったことは、決して知識人層のみではなく、中国の大衆も結局、政治体制に制限された思想的空間のなかでしか想像力を展開することができなかった。

個人の思想の自由が保障されていなかったことは、共産党政権の政治体制のいちばん大きな問題ではないかと思われる。

なお、現在、本研究の成果をまとめた『旧知識分子の「立場」と役割の転換と中国革命の政治文化 1950 年代のプラクティスとディスコース』という著書を執筆中である。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

轟莉莉「人民に奉仕する英雄 全体主義下の個人と「人民」」『民博通信』2006.No.114:06~07頁、国立民族学博物館、2006年。査読無。

[学会発表](計2件)

2009.12.12 轟莉莉

「『旧知識分子』の『立場』と役割の転換と中国の政治文化」、歴史問題研究会、東京女子大学において

2007.9.5 轟莉莉

「社会主義革命時代の英雄雷鋒」

「日中雷鋒精神研究会フォーラム」、中国遼寧石油化工大学において

6. 研究組織

(1)研究代表者

轟莉莉(NIE LILI)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：00258493